

Re public of Madagascar

EARTH GALLERY Vol.148 [マダガスカル共和国]

地球ギャラリー
写真文・阿部雄介(フォトグラファー)

保護監視林内にテントを張り、幾夜もラミーの大木の近くでアイアイを待つと、
ついに森の中から若いアイアイが現れた！ ライトに浮かび上がりこちらを見つめるその奇妙な姿には驚かされた。
現地では不吉な動物として、殺されてきたという歴史もある。

レムール の 楽園を守れ



違法であるにもかかわらず、また野焼きの煙が上がる。



上空から見た乾季の北部乾燥帯。緑は保護区と川岸だけにしか残されていない。しかし、雨季になるとむき出しの赤土には草が生え、一面の緑となる。



艶やかなカーベットカメレオン。マダガスカルには世界の半数以上の種のカメレオンが棲むが、ベトナム産の密猟も生存を脅かす。



保護監視林の台地の上には、乾燥に強いバキボディウムの仲間が一面に生えている場所があった。



大型レムールのインドリ。同じ属で200kgを超えたアルケオインドリスは、すでに絶滅した。



東海岸の熱帯雨林地域に生息するヒガシアバヒ。9種のアバヒのすべてが絶滅危惧種で、うち2種は危機的状況だ。



保護監視林内のココレルシファカ。森林破壊や狩猟で数を減らしている。



アイアイはその長く細い中指で虫や木の実を掘り出して食べる。

ラミーの大木を強ライトで照らし、村人とともにアイアイを探す。
夜行性で単独行動をし、広い範囲を動き回るため遭遇するのも簡単ではない。



世界に類を見ない独特の生物相を持つ

「不思議の島」マダガスカル。巨大な幹を持つバオバブや、棘に覆われたパキポデイウムなどがつくり出す奇妙な景観と、カメレオンやレムール（キツネザルの仲間の原猿類）などのユニークな動物たちが織りなす世界は、まるで別の惑星に来たかのような錯覚すら覚えるほどだ。

マダガスカルは、古代に存在した巨大大陸ゴンドワナ（アフリカ、南米、オーストラリア、インド、マダガスカル、アラビア半島、南極などが含まれた）の中心に位置した陸塊で、約1億6000万年前にアフリカ大陸と離れて以来、ほかの陸地と地続きになつたことがない。そのため生物が独自の進化を遂げ、現在生息する生物の大半がマダガスカルで見られるものとなつた。特にレムールは100種（絶滅種を含む）を超え、しかもすべてが固有種だ。

そのレムールの中でもひととき異彩を放っているのがアイアイだ。日本人には童謡でなじみがあるが、その外見はサルにはまったく見えない。ネコほどの体にキツネのような太く長い尾を持ち、全身が黒い剛毛に覆われ、コウモリのような大きな耳と針金のように細長い中指を持つ。世界に1科1属1種で、唯一マダガスカルにだけ生息する。実は、かつてこの地にはジャイアント・アイアイという大型種が生息していたが、1000年

前には絶滅している。

マダガスカルは、少なくとも5世紀ごろまでは完全な無人島で、まさに野生の楽園そのものだった。しかし、はるか離れた東南アジアから人類が遠洋航海で到達すると、彼らは焼き畑と稲作の技術で森を開墾して田畑をつくり、牛を飼いはじめた。大半が乾燥帯であるマダガスカルでは、一旦破壊された森林は回復に長い時間がかかる。その結果、数億年にわたって育まれた楽園は壊滅的なダメージを受けた。人口増加が著しくなつた近代にはさらに森林破壊が加速的に進み、現在残された森林面積は国土のわずか8パーセントともいわれている。特に問題とされているのは野焼きだ。焼け跡の草地に牛を放牧し、草地の維持目的で数年おきにくり返し火をつけられて、延焼も招いている。

2020年、マダガスカルのレムール類の96パーセントが絶滅危惧種に指定されたが、ほかの動植物も大半が同様の危機に瀕している。固有種ゆえに、ここで絶滅はすなわち地球上からその種が永遠に失われることを意味する。

マダガスカルの北西部にあるアンジアマングラナは、アイアイや多くのレムールをはじめとするさまざまな固有動物の生息地。上野動物園のアイアイの故郷でもある。ここにはアイアイの主食でクルミのような実をつけるラミーの大木

が多く、約144平方キロメートル（東京・目黒区の約10倍）が保護監視林に指定されて、日本アイアイ・ファンドの管理の下、村人たちが中心となつて森を守っている。ラミーは苗から育てられ、果樹や延焼に強い樹種とともに植林される。森林減少は土地の乾燥化や水源枯渇という深刻な問題を引き起こしているため、森を守ることは動物ばかりではなく村人の生活にも強く関わっているのだ。

植林をしていく一方で、違法な野焼きも依然としてやむことがない。村人による防火活動も行われているが、数年間の植林と育成にかけた苦労がたつた数時間で消えてしまうこともある。しかし、地元でも水源林を守るという意識は高まつていて、野焼きの頻度は減りつつあり、森は少しずつだが回復に向かっている。

保護監視林とは、住民を排除せず生活林として利用可能な保護林のあり方。村人とアイアイたちが共存していく未来は、この地で暮らす人々の意識に委ねられている。そしてそこに託した夢は地球と人類の共存の夢でもあるのだ。

阿部雄介（あへゆうすけ）

紀行、自然、環境などをテーマに活動。熱帯雨林や野生動物をライフワークとして広く国内外で撮影。2009年にマレーシア・サバ州政府主催「サバ・ツォリスムアワード」にて海外記事部門最優秀賞を受賞。共著に『ハリスツイードとアラシセーター』ものづくりの伝説が生きた島（万来舎）、『まぼろしの大陸 スンダランド オランウータンをそだてた森』（福音館書店）月刊たぐさのふしぎ』など。



左：焼けた植林地に立つ日本アイアイ・ファンドの島 泰三代表（右）。中：植林は村人たちの仕事。右：種から育てた苗木。